

文芸

俳句

たんぼの季の便りの庭に咲く

池田 逸子

住み慣れし里の隅つこ蛙鳴く

伊藤 敬子

蕾薔薇支柱に凭れ風任せ

今関満喜子

お喋りが一瞬止まる花ふぶき

魚地 照子

夕風や洲へ片寄る花筏

江森 悦子

風五月競つものなしスカイツリー

川島 通則

訝する極相林の風光る

向後 寛

楨扉の青より出でて黄山吹

越川せつ子

碧空に我が家は男の子と鯉幟

越川 福子

次々と春波豊み泡の花

小松 藤男

盃伏せし句友を乗せた花筏

佐瀬 輝夫

ピアスして早苗を運ぶ若き妻

椎名万里子

老夫婦話とぎれて目借時

鈴木とし子

葉桜やこの道の奥能舞台

鈴木 利子

田の面までひびく祭りの習い笛

玉虫 栗扇

畦を行く麦稈帽子かぶり初め

土屋美枝子

代掻くや水の匂ひの朝の村

土屋 義昭

わが家まで風に乗る祭祭笛

戸村 静華

夏場所は早め一杯呑み乍ら

内藤 くに

八重桜シャッター通り点したる

西崎さち子

来世など愉快に語る春炬燵

早川 勇

短歌

自転車で桜並木をふはり行く

八角 三枝

薄桃色の風に包まれ

青木 秀子

赤錆し杉に緑の甍がへり

田崎 尚美

気のおけぬ友等八人吾が家にて

鈴木まさ子

料理をつくり食べて帰りぬ

境内の阿吽の狛犬に触りぬつ

幼き頃の遊び場なりき

暮れ泥む空を惜しみてトラクター

田に入りゆく代掻きせむと

押尾 輝子

春霞の空に浮くがに飛行船
スカイツリーの下に止まる

西山満里子

葉の色と見紛ふみどりの花咲かす
御衣黄桜と呼ぶる花は

芹川 初子

あぜ道になづなの小花咲き盛る

平山 芳子

夕暮の里友と歩めり

朝早く車とばして高井戸より

筒掘ると敏恵が来たり

吉岡 信子

乾きたる吾の心が久に聞く

島田ますみ

コンサートの中潤ひてゆく

齊藤つね子

震災の後職を辞め男の孫は

ボランテニアすと仙台に行く

大空を飛ぶ飛行機に見とれては

操縦席での己が姿浮かぶ

水張りの田圃に蛙合唱す

萎えし我をば励ますように

猫の手も借りたい程の五月来る

手植せし頃思ふ雨の日

路測のなだり一面紫に

毛氈敷くごと佛のつづれ

明日植えむ鏡のごとき水張田

染めて真紅の落暉極まる

越川 義則

こうほう 博物館 51

絵の中の文楽

今回紹介する絵は、三年前、町に寄贈された北清水に在住した伊藤一路が描いた作品の一つです。

伊藤一路は、昭和三（一九二八）年、北清水の医者之家に生まれ、大学では医者を目指すが、油絵にも興味を持ち学び始めました。地元に戻って父の後を継いで、開業医を始めますが、絵への情熱は衰えず、中央美術学園で絵を学ぶようになり、昭和四十一年頃から描きためた絵を、東京の画廊での個展や、グループ展に出品したりしました。昭和五十一年には、海外展にも出品するようになり、その頃から一路は文楽を題材にした絵を描き始め、以後、病気で描けなくなるまで、文楽を題材にした多くの絵を残し、平成七年、病で永眠しました。

楽の絵は、「勸進帳の義経」や「曾根崎心中のお初」など主役の人形だけでなく、人形使いも描いたり、直線を交錯させた抽象表現の絵もあります。その描く対象は人形であつても、人間の生と死の極限を見、それを絵に表そうとしたのかもしれない。文楽は大阪で流行った人形浄瑠璃と呼ばれる劇で、歌舞伎の元にもなっています。ここに示した絵は、「曾根崎心中」の中の「抱擁」と題したものです。今月二日から、町民ギャラリーで「伊藤一路 文楽を描く」展を開催します。



伊藤一路が描いた文

「抱擁」